広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第六一号　二〇一二　三四四―三五〇

親鸞加点本に呉音声調の年代差は無い

佐々木　勇

（受理日二〇一二年十月二日）

一、本稿の目的

本稿は、親鸞（一一七三―一二六二）を対象として、院政・鎌倉時代を生きた一個人の生涯に、呉音声調上の年代変化が見られるか否かを調べることを目的とする。

二、研究の方法

親鸞は、青年期から晩年まで、各種の文献を残している。[1]

親鸞遺文は、本文が漢文のものに、字音直読資料・中国漢文訓読資料・日本漢文訓読資料が有る。また、仮名を交える文献にも、漢字片仮名交じり文（『西方指南抄』の類）・片仮名漢字交じり文（『一念多念文意』の類）・平仮名漢字交じり文（平仮名本『唯信抄』、書簡の類）を遺存する。

親鸞遺文を対象とする漢字音研究では、右のうち、漢文を音で通読した字音直読資料と、漢文を訓読した資料および漢字片仮名交じり文とは、区別すべきである。[2]

よって、親鸞における字音声調の年代差比較は、その両者を区別して行なう。

三、本稿の対象資料

本稿の目的から、年代の隔たった声点加点文献が遺る文種が対象となる。その条件に適う資料として、親鸞の青年期と晩年期とに声点加点資料が存する、字音直読資料と漢文訓読資料とが選ばれる。

本稿では、この二種の文献において、字音声調の年代差を見る。

1．字音直読資料

親鸞遺文のうち、青年期の字音直読資料として、親鸞二十九歳～三十四歳（一二〇一～一二〇六年）頃に書写されたとされる[3]『觀經・阿弥陀經集註』の経文本文朱声点が有る。

また、親鸞は、建長八年（一二五六）八十四歳時に、専修寺蔵『四十八誓願』真佛書写本に、字音直読の朱声点を加点している。[4]

よって、『觀經・阿弥陀經集註』と『四十八誓願』両文献の経文音読声点を比較することによって、約五十年を経て、親鸞の字音直読資料における声調が変化したものか否かを知ることができる。

2．漢文訓読資料

右の親鸞青年期筆『觀經・阿弥陀經集註』の行間・裏書きの註文は訓読されており、その漢語に、わずかながら漢文訓読の声調を示す声点が加点されている。これを、親鸞青年期漢文訓読における字音声調資料とする。

一方、親鸞晩年の漢文訓読における漢語声調資料として、右『四十八誓願』と同じ、建長八年八十四歳加点の『浄土論註』朱声点[5]および、坂東本『教行信証』の大墨声点[6]を採り上げる。坂東本『教行信証』大墨声点は、六十歳頃から

晩年まで、数度に亘って加点されたもの、と考えられる。[7]

四、調査結果

1．字音直読資料における親鸞の字音声調

A．具体的比較の方法

専修寺蔵建長八年写『四十八誓願』は、『無量壽経』から四十八願を抜き出した文量の少ない文献であり、全三五二例の声点加点例しか無い。その声点が、「一音節去声字の上声化」「二音節去声字の上声化」および「入声「急」と「緩」の加点方式」において、親鸞青年期加点の『觀經・阿弥陀經集註』と変わるところが無いことは、すでに検討済みである。[8]

そこで、本稿では、漢字一字ごとに、加点された声点を比較する。

この比較は、前接字声調の影響を除外するため、句頭字に限り、加点数が少ない『四十八誓願』句頭字と同一の漢字に、親鸞『觀經・阿弥陀經集註』でいかなる声点が加点されているかを個別に見る方法を採る。

句頭の判断は、『四十八誓願』の朱句切り点に依る。ただし、『四十八誓願』は、句切り点無加点の部分が有り、『影印高田古典［第一巻］真佛上人集』（一九九六年、真宗高田派教学院）複製本がモノクロであるため、朱点有無の判断困難な場合も存する。その場合、『四十八誓願』の声点とほぼ一致する声点加点がなされている西本願寺蔵『無量壽經』正平六年写本[9]の句切り点を参照する。

B．比較結果

『四十八誓願』句頭字声点加点例は、以下の下欄挙例が全例である。（当該字の声点のみ記す。ただし、『觀經・阿弥陀經集註』の句中例引用は、〈　〉に入れた上で、前接字に声点が存すればそれも記した。仮名・反切は省略した。）

『觀經・阿弥陀經集註』経文声点	『四十八誓願』句頭字声点
1其(去濁)數甚多(阿52)、其(去濁)光金色(觀49)、其(去濁)幢八方(觀93)、其(去濁)摩尼水(觀135)、其(去濁)樓閣中(觀140)、其(去濁)光金色(觀194)、其(去濁)圓光中(觀230)　など12例	1其(去濁)諸衆生（九オ1）、其(去濁)道場樹（九オ5）、其(去濁)有女人(十二オ2)
2於(去)汝意云何(阿43・97)、於(去)王宮出(觀37)　など11例	2於(去)汝意云何(阿43・97)、於(去)王宮出(觀37)　など11例
3諸(去)寶行樹（阿39）、諸(去)波羅蜜（觀136）　など9例	3諸(去)寶行樹（阿39）、諸(去)波羅蜜（觀136）　など9例
4无(去)三悪趣(阿36)、无(去)由得見(觀33)　など9例	4无(去)能稱量(九オ1)
5爲(去)王説法(觀14)、爲(去)王作禮(觀22)　など6例	5爲(去)衆生故(六ウ5)
6知(去)韋提希(觀36)、〈汝今(去)知(去)不(觀61)〉　など3例	6知(去)其數者(四ウ2)
7池(去)底純以(阿19)、池(去)中蓮華(阿21)　など3例	7池(去)流華樹(十ウ2)
8修(去)行諸戒(觀346)、〈令與修(去)多羅合(觀198)〉	8修(去)菩薩行(七オ2)
9除(去濁)八十億劫(觀107)、除(去濁)却千劫(觀377)	9除(去濁)其本願(六ウ5)
10猶(去)存在邪(觀16)、猶(去)如天畫(觀158)	10猶(去)如明鏡(十四オ2)
11修(去)諸三昧(觀330)	11修(去)諸功德(五ウ4)
12遊(去)歷十方(觀341)	12遊(去)諸佛國(七オ2)
13菩(去濁)薩三万二千(觀3)	13菩(去濁)薩聞者(十ウ5)
14〈妙華(上)宮(上)殿(平濁)(觀117)、七寶宮(上)殿(觀306)〉	14宮(去)殿樓觀(十ウ2)
15〈天人阿(去)脩(上)羅等(阿117)〉	15脩(去)短自在(四ウ5)
16聞(去)説阿彌陀佛（阿57）、聞(去)是説者（阿62）、聞(去)衆音聲（觀353）、〈衆生聞(去)者（阿54）、如是我(平濁)聞(去)（觀2）〉など11例	16聞(去)我名字(十六ウ2)
17應(去)當發願(阿63)、應(去)時即得(觀78)、應(去)時即於(觀328)、應(去)堕地獄(觀392)、應(去)堕悪道(觀403)　など6例	17應(去)法妙服（十三オ5）、應(去)時如願(十四オ1)
18嚴(去濁)顯可觀（觀54）、〈雜色寶華(上)嚴(去濁)身佛（阿91）〉	18嚴(去濁)淨光麗(八ウ4)、嚴(去濁)飾奇妙(十ウ4)
19生(去)彼國土(阿63)、生(去)此悪子(觀42)　など30例	19生(去)尊貴家(十五オ3)
20身(去)塗麩蜜(觀17)、身(去)紫金色(觀229)　など21例	20身(去)心柔軟(十一オ5)

21來(去)慰問我(觀32)、來(去)迎接汝(觀321)　など5例
22稱(去)讃(阿68)、稱(去)南无阿弥陀佛(觀378)　など5例
23常(去濁)精進菩薩(阿10)、常(去濁)讃念佛(觀138)　など3例
24〈佛身(去)高(去)六十万億(觀205)、莊嚴高(去)顯(觀267)〉　など3例
25閉目開(去)目(觀88)〉
26〈其人(上)臨(去)命終時(阿59)〉
27貪(去)國位故(觀23)
28〈八十隨(去濁)形(上濁)好(觀182)、所現之形(上濁)(觀292)〉
29〈受苦无(去)窮(上濁)(觀404)〉
30〈劫賓(去)那(上)(阿7)、富樓(上)那(上)(觀14)、阿(平)那(上)含(觀60)〉
31與(平)諸(上)聖衆(阿60)、彼(平)諸(上)佛等(阿109)〉　など22例。
32〈彼佛壽(平濁)命(阿45)、佛説無量(平)壽(平濁)觀經一卷(觀1)〉
33被(平)幽閉已(觀30)
34五(平濁)根五力(阿32)、五(平濁)體投地(觀47)
35〈名第(平濁)一觀(觀101)、亦當次第(平濁)(觀128)〉
36復(平濁)次舍利弗(阿30)、〈不令(上)復(平濁)出(觀30)〉
37若(入緩)得三昧(觀104)、若(入緩)他觀者(觀109)、若(入緩)一日(阿58)、若(入緩)佛滅後(觀81)、若(入急)觀是地者(觀107)、若(入急)見此者(觀145)
38欲(入緩)害其母(觀21)、〈若欲(入緩)念彼佛者(觀173)〉

21來(去)生我國(六ウ4)
22稱(去)我名者(五オ5)
23常(去濁)修梵行(十二ウ2)
24高(去)四百万里者(九ウ1)
25開(去)化恒沙(七オ3)
26臨(去)壽終時(五ウ5)
27貪(去)計身者(三ウ2)
28形(去濁)色不同(一ウ3)
29窮(去濁)微極妙(八ウ5)
30那(上)羅延身者(八ウ3)
31諸(上)所欲求(八オ3)
32壽(平濁)終之後(一オ4)、壽(平濁)終之後(十五オ3)
33被(平)弘誓鎧(七オ1)
34五(平濁)體投地(十二ウ5)
35第(平濁)三法忍(十六ウ5)
36復(平濁)更三悪道者(一オ5)
37若(入緩)受讀經法(九ウ2)、若(入緩)不爾者(四ウ5・十オ4)、若(入急)起想念(三ウ1)、若(入急)可限量者(十オ1)
38欲(入緩)生我國(五ウ2・五ウ5)

39發(入急)菩提心(觀67)、發(入急)阿耨多羅(觀419)・發(入急)无上道心(觀333)
40一(入急)者(觀299)、一(入急)時(上濁)佛(觀2)　など14例
41十(入急濁)方(去)(觀49)、〈手十(入急濁)指(上)端(觀240)〉　など5例
42莫(入急)不彌滿(觀245)
43(ナシ)
44(ナシ)
45(ナシ)
46(ナシ)
47(ナシ)
48(ナシ)
49(ナシ)
50(ナシ)
51(ナシ)
52(ナシ)
53(ナシ)
54(ナシ)
55(ナシ)

39發(入急)菩提心(五ウ4・十二オ3)
40一(入急)生補處(六ウ4)
41十(入急濁)方衆生(五ウ1)
42莫(入急)不致敬(十三オ2)
43超(去)過百千億那由他(三オ3)、超(去)諸人天(十ウ4)
44承(去濁)佛神力(七ウ3)
45厭(平)悪女身(十二オ3)
46係(平)念我國(六オ3)
47稽(平)首作禮(十三オ1)
48誹(平)謗正法(五ウ3)
49使(平)立无上(七オ4)
50假(平)令不與(六オ1)
51諷(平)誦持説(九ウ3)
52覩(平)其面像(十オ4)、覩(平)其面像(十四オ2)
53辨(平濁)其名數者(九オ2)
54積(入緩)累德本(七オ1)
55觸(入緩)其身者(十一オ4)

以上、八十四歳加点『四十八誓願』(下段)の声点は、三十歳頃加点『觀經・阿弥陀經集註』(上段)と、完全に一致している。

両資料書写加点の五十年間は、「一音節去声字の上声化」が進行し、ほぼ完成に至る期間である。[10]

しかし、右1～13の例によって知られるとおり、八十四歳時加点『四十八誓願』においても親鸞は、青年期と変わらず、一音節字を去声で発音することを指示している。

その中で、30梵語音写字「那」と、31「諸」とに上声点加点例が見られる点も、両資料で一致する。

以上、親鸞は、この五十年間に、字音直読資料における字音声調を変更していない。

2．漢文訓読資料における親鸞の字音声調

A．具体的比較の方法

漢文訓読における漢語声調を示した、青年期『観經・阿弥陀經集註』註文声点と晩年期『浄土論註』朱声点および坂東本『教行信証』大墨声点とが、「一音節去声字の上声化」「二音節去声字の上声化」および「入声「急」と「緩」の加点方式」において、大きく異ならないことも、すでに検討済みである。[11]

そこで、ここでも、『観經・阿弥陀經集註』註文の親鸞青年時声点加点字と、晩年時加点『浄土論註』朱声点および坂東本『教行信証』大墨声点とで、同一の漢字を対照させる。

今度は、『観經・阿弥陀經集註』註文声点（上段）の全体数が少ないため、『観經・阿弥陀經集註』註文の語頭声点加点字と同一字への声点加点例を、『浄土論註』朱声点および坂東本『教行信証』大墨声点に求めた。

なお、坂東本『教行信証』には、漢音声調加点例が比較的多い。[12] 本稿は、呉音声調の年代差を見るのが目的であるため、両者に同一字への加点例が存しても、それぞれが呉音声調と漢音声調とを示している場合は、対応声点加点例（ナシ）とする。

B．比較結果

『浄土論註』の所在は、巻の「上」「下」と頁数・行数とで示し、『教行信証』の所在には「教」を冠した。語中の声点加点例は、〈　〉に入れ、参考として掲げた。

『観經・阿弥陀經集註』註文声点	『浄土論註』・坂東本『教行信証』
56縁（去）（観裏二六）	56縁（上）シテ（下105.2教49.5）、縁（上）而（シテ）（教四46.7 46.7）
57成（上濁）セリ（観裏十四）、成（上濁）セム（観裏十四）	57成（去濁）滿（上）衆（上）禍（平）（教六本53.7
58心（去）（観註六〇・観裏十二・十二・十三・二五・二五・二六・二七・二七・二九・二九・二九・三一・三一・三二）	58心（去）（上38.2 80.2 80.2 80.3など38例・教二21.5 23.4 40.1 42.4 54.1 55.4 58.3 59.2 62.6 63.1 65.2など157例）
59稱（去）セシム（観註六〇）、稱（去）セ（観裏二六・二七・二九）、稱（去）スル（観裏二九）	59稱（去）セシ（上93.1）、稱（去）スヘシ（上106.6）、稱（去）（教二43.3 三83.8 四46.4 五7.7 14.4）
60生（去）ス（観裏十二）、生（去）スル（観裏二六）、生（去）シテ（観裏二七）	60生（去）（上7.4 7.5 30.2 30.3 30.3 60.6など22例・教三44.1 54.4 54.5 135.4）
61神（平）人（上濁）（観註五七）	61神（平）（上118.6・教五51.1）、神（平）ナラムヤ（下50.4）、神（平）智（下127.2）
62異（平）（観裏二八）	62異（平）スル（下10.1 11.5）、〈周（平軽）異（平）（教六本94.2）〉
63種（平）（観裏十二）	63種（平）（上60.6）、種（平）智（下89.5）
64會（平）（観裏十四）	64會（平）ス（下85.2）、會（平）（教四29.7）
65寶（平）蓮（去）（観註六〇）	65寶（平）（上47.5下30.6・教二62.7）、寶（平）沙（下34.3）
66應（平）ス（観註三五）、應（平）現（観註三五）	66應（平）シ（上96.6 108.1下104.6）、應（平）ス（下85.1）、應（去）（下5.2・教四46.5六末70.6）
67表（上）ス（観裏三一）	67表（上）裏（上）（教六末85.4）
68身（去）（観註五〇）	68身（去）（教三133.5 133.6）
69人（去）我（平濁）（観裏二七）	69人（去）我（平濁）（教六本78.8）
70〈人（去）我（平濁）（観裏二七）〉	70〈人（去）我（平濁）（教六本78.8）〉
71專（去）（観裏二七）、專（去）雑（入濁）（観裏二八）	71專（去）（教六本53.2）
72張（平）（観註五七）	72張（平）掄（平）（教二87.5 88.5）、張（平）儀（平濁）相（去）（教六末69.3）
73轉（平）蓬（平濁）（観註三八）	73轉（平）（教二108.7 六本53.7）
74〈小眞（去）（観註五四）〉	74眞（去）（教二88.2 六本3.7）
75刹（入）（観裏十四）	75刹（入）那（上）（教三169.8）
76識（入）颺（観裏二七）	76識（入）（教二65.6）
77精（去）（観裏十四）	77（ナシ）
78教（平）（観裏二七）	78（ナシ）
79餘（去）（観裏二五）	79（ナシ）

80	修（上）シテ（観裏二九）	80（ナシ）
81	鍾（上）撞（上）（観註五七）	81（ナシ）
82	同（上濁）セシメ（観裏十四）	82（ナシ）
83	因（去）（観註六〇）	83（ナシ）
84	廻（去）シテ（観裏二六）	84（ナシ）
85	呈（去）ス（観裏十四）	85（ナシ）
86	文（去）（観裏三一）	86（ナシ）
87	蓮（去）（観註五四）	87（ナシ）
88	憫（去）（阿裏十五）	88（ナシ）
89	神（去濁）飛（観裏二七）	89（ナシ）
90	課（平）稱（観裏二七）	90（ナシ）
91	境（平）細（平）（観裏二七）	91（ナシ）
92	係（平）念（観裏二七）	92（ナシ）
93	垂（平）（観註五六）	93（ナシ）
94	退（平）セ（観裏三二）	94（ナシ）
95	余（平）（観裏二八）	95（ナシ）
96	亂（平）動（観裏二七）	96（ナシ）
97	證（平）セス（観註三五）	97（ナシ）
98	〈轉蓬（平濁）（観註三八）〉	98（ナシ）
99	失（入）スル（観裏二七）	99（ナシ）

右の比較による不一致例は、はじめに掲げた、56 57のみである。

56縁は、上段『観經』註文声点が去声、下段『浄土論註』・『教行信証』が上声であり、57成は、反対に、『観經』が上声、『教行信証』が去声である。

しかし、両者は、漢語サ変動詞の例に上声点が加点されている点で、一致する。

56縁は、坂東本『教行信証』の語頭例において、「縁す」の場合のみ上声点が加点され、「縁」や「縁覚」の語例では、去声点が加点されている。[13] また、前田家本『色葉字類抄』で、和語および日本語化した漢語音形を記すのが原則の漢字右下に、「縁ェ（上）ン（上）」（下15ウ1・人事）と仮名書きし、両仮名に上声点が加点されている。

これらの点から、日本語化した「縁」の声調は上声であった、と考えられる。「成す（ジヤウ）」も、坂東本『教行信証』に、「成（上濁）ス」（二124.5六本77.8）・「成（上濁）シ」（六本42.6）の例が有る。しかし、坂東本『教行信証』の「成」への語頭声点加点他例は、「成（去濁）也」（三41.1）・「成（去濁）壞スル」（三27.2）・「成（去濁）就」（二110.6 123.6 136.4 三43.5 四24.2 37.7 42.4 52.6 五73.6 六本5.7 19.4）と、去声加点である。[14] よって、漢語サ変動詞「成す（ジヤウ）」では、「成（ジヤウ）」は、去声ではなく、上声で唱えられたらしい。[15]

右のごとく、56縁57成に表出した両資料の相違は、漢語サ変動詞における声調と、それ以外の漢語声調との相違であると考えられる。[16]

したがって、この「縁」「成」に見られた声調上の相違の原因を、加点の年代差には求められない。

以上、親鸞加点の漢文訓読資料においても、時を隔てて加点された声点は、一致している。

五、結論

本稿の目的を、親鸞に、呉音声調上の年代変化が見られるか否かを調べることと定め、青年期と晩年期とにおける、字音直読資料および漢文訓読資料の声点を比較した。

その結果、親鸞には、字音直読資料・漢文訓読資料とも、呉音声調上の年代差は見られなかった。

これが親鸞個人の規範的・統一的な加点態度によるものかどうか、異なる人物について同様の調査をなすことが、今後の課題である。

【注】

(1) 『増補 親鸞聖人真蹟集成』（二〇〇六年、法蔵館）等、参照。

(2) 佐々木勇「鎌倉時代における呉音声調の位相差 ―親鸞加点本を資料として―」（発表予定）。

(3) 宮崎圓遵『真宗書誌学の研究』（一九四九年、永田文昌堂。『宮崎圓遵著作集 第六巻』〈一九八八年、永田文昌堂〉）、参照。

(4) 佐々木勇「専修寺蔵『四十八誓願』建長八年真佛写本の朱訓点について」（「高田学報」第百輯、二〇一二年三月）、参照。

(5) 墨声点は、異なる形式が見られるため、朱声点に限定する。

(6) 佐々木勇「親鸞使用の声点加点形式について ―坂東本『教行信証』声点

の位置づけ―」（「訓点語と訓点資料」第一二九輯、二〇一二年九月）で、この声点のみ親鸞加点であることを述べた。

(7) 右注佐々木論文、参照。

(8) 佐々木勇「呉音二音節字に対する上声点加点例について」（「国文学攷」第113号、一九八七年三月）、注(2)・(4)佐々木論文、参照。

(9) 佐々木勇「西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年存覺書写本の朱点について―親鸞自筆加点本および龍谷大学蔵南北朝期加点本との比較―」（「訓点語と訓点資料」第一二六輯、二〇一一年三月）、参照。

(10) 奥村三雄「音節とアクセント　―呉音声調の国語化―」（「国語国文」第二二巻十一号、一九五三年十一月）、橋本萬太郎他著『岩波講座日本語　5　音韻』（一九七七年、岩波書店）、中田祝夫編『講座国語史　2　音韻史・文字史』（一九七二年、大修館書店）、高松政雄『日本漢字音の研究』（一九八二年、風間書房）、沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）二六二頁、佐々木勇「呉音一音節去声字の上声化の過程」（「鎌倉時代語研究」第十輯、一九八七年五月）等、参照。

(11) 注(2)佐々木論文、参照。

(12) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」（「東洋大学大学院紀要」第2集、一九六五年九月）、佐々木勇「親鸞筆『教行信証』の漢音―出現箇所と加点理由―」（「広島大学学校教育学部紀要」第二部第十九巻、一九九七年一月）、参照。

(13)(14) これらは、親鸞自筆加点であることが疑われるため、坂東本『教行信証』の用例から除外し、本稿の対象としなかったものである。しかし、鎌倉時代の加点例である。

(15) そうであれば、「縁す」「成（ジヤウ）す」は、「連体形が四拍のもの」のうち、「上声の字音語プラス「す」のもの」（金田一春彦『四座講式の研究』（金田一春彦著作集　第五巻。二〇〇五年九月、玉川大学出版会）465頁）であり、連用形は、●●●型となる。

木田章義「その後の〈連濁とアクセント〉」（梅花女子大学『開学十五周年記念論文集』〈一九八〇年三月〉所収）では、漢語サ変動詞「成ぜ（ラル）」が属する『補忘記』の●●●型は、南北朝期アクセント変化「出合」の影響を受けず、鎌倉時代から現代まで●●●型を保った。そのため、「少数の連濁形も残り得た」、と解釈されている。親鸞も、連濁形「縁ず」「成（ジヤウ）ず」を採っていたかもしれない。

(16) この点、漢語サ変動詞全体のアクセントを、他の漢語アクセントと比較・検討すべき課題である。

【謝辞】

本稿は、山陽放送学術文化財団平成21年度研究助成（人文・社会科学部門）・平成22年度（2010）稲盛財団研究助成（人文・社会科学分野）・第40回（平成23年度）三菱財団人文科学助成・JSPS科研費23520553の助成を受けた研究成果の一部である。明記して、感謝申し上げます。

There was No Age Difference in Shinran's（親鸞）Texts of Kanji Pronunciation

Isamu Sasaki

Abstract : The purpose of this paper is to examine the difference in Kamakura Period at the age of the tone of the Chinese character sound. Surveyed to live until the year 1262 from 1173, the texts of Shinran（親鸞）. Shinran（親鸞）in the texts to compare with adolescence and late age.

To compare the tone of the sound of Chinese characters adolescence and late age of Shinran（親鸞）.

The survey, carried out and the materials were read the Chinese classics Ondoku（音読）, and the Chinese classics was Kundoku（訓読）.

Results of the investigation, Ondoku（音読）and Kundoku（訓読）, there was no age difference.

This may be due to its uniform writing by Shinran（親鸞）.

In the future, about someone other than Shinran（親鸞）, we will need to investigate the same.

Key words :tone,Goon,age difference

キーワード:アクセント，声調，呉音，年代差，年齢差